

既習 N3 語彙の定着を目標にした教材作成と授業デザイン —『はじめての日本語能力試験 N3 単語 2000』を使って—

エルサイド祐子

要旨

留学生にとって、日本語学校を卒業する前に N3 レベルの語彙を身につけておくことは大切だと思われる。しかし、復習やテストで定着を強化したり、できるだけアウトプットする活動を工夫したりしても、既習の語彙定着が困難で、学習意欲や自信の低下にも影響している様子が感じられた。このような状況を踏まえ、授業で使用している N3 単語テキストから既習語彙を選定し、タスク教材の作成を試み、タスクを通じて既習の同一語彙に、繰り返し触れられるよう工夫した。同時にクラス全体で課題に取り組むためのマインドセットを示し、モチベーションの再調整を試みた。また個人面談を行い、自宅学習の時間や方法についての自覚を促した。作成したタスク教材で、授業をデザインし、約 1 か月間実施した。終了後のアンケート結果等も踏まえ、教材を語彙習得にどう活用していけばいいか、今後も長期的な検討を重ねていきたい。

キーワード

日本語学校、語彙学習、JLPTN3

1. 背景

1.1 学習者の背景

本実践は、告示校の留学生のクラスで行った。学習者は実践当時、来日約 1 年半で、2026 年 3 月に卒業予定となっていた。卒業後は進学（主に専門学校）や特定技能ビザで就職を目標としている。クラス人数は 20 名で、ベトナム国籍 19 名、中国国籍 1 名である。クラスの目標の 1 つは、卒業までに JLPT の N3 を取得することである。2025 年度第 1 回の試験で、3 名が合格した。

筆者は、2025 年 4 月からクラス担任として、学習者の授業を担当していた。日頃、学習者から、漢字、語彙がどうしても覚えられない、覚えてもすぐ忘れてしまうという声、勉強した語彙が使えるようになりたいが、難しいという声が多かった。学習者は、4 月から授業や課題にまじめに取り組んでいたが、語彙を覚えることに困難を感じたり、7 月の第 1 回 JLPT に合格できなかつたりで、自信を失っているように感じられた。クラスを担当する他の講師からもクラス全体のモチベーションも低下気味で、グループワークなどに取り組む意欲が下がってきているとの指摘もあった。

1.2 モチベーションの再調整

N3 合格や、卒業後に必要な日本語力を習得するという目標に向かって、課題に意欲的に取り組んでいくために、クラス全体でモチベーションの再調整が必要であると考えた。そのため、授業で課題に取り組む際のマインドセットを更新することにした。2025 年 9

月、次の3点について、全体像を学習者に示した。1. ゴールに向かうための課題に取り組むステップ 2. 課題に取り組む際の態度 3. 目標達成をどう確認するか。この3点について、全18のキーワードをA4用紙に書き、ホワイトボードにピラミッドの形で上から順に貼りながら、説明していった。クラスを担当する講師にも説明し全員で共有した。キーワードを考える際、『学習意欲をデザインする』のARCSモデルを参考にした。

説明の後、学習者の課題やグループワークへの取り組みに、少しずつ変化が現れてきた。停滞しつつあったクラス全体の雰囲気、活性化してきたことが感じられた。他の講師からも同様の声があった。その理由として、まず、活動のゴールを明示し、自分に関係があることとして、引き付け、集中を喚起したことでやる気のエンジンがかかりやすくなったと考えられる。そして、活動の流れに緩急をつけ、ステップを明示したことで、取り組みやすくなったのではないと思われる。

1.3 個別面談

クラス全体で課題に取り組んでいくためのモチベーションの再調整と同時に、1人ずつ授業後に面談を実施し、自宅での学習状況を調査した。教室では、ほぼ全員から一番困難なのは漢字と語彙で、繰り返し学習しても記憶が定着しないと聞いていた。そこで、面談前に1週間の生活スケジュール表を配布し、アルバイト、自宅学習、家事や睡眠などに使っている時間がどのくらいなのか、一目でわかるように記入してもらった。表は横列に曜日、縦列に時間を1時間単位で記入できるようにした。現在、どのくらい自宅で学習できているのか、語彙をどうやって勉強しているのか、あとどのくらい学習時間を増やせるのかを一緒に検討していった。面談終了後、全体の傾向として次の2点が浮かび上がった。1名を除き皆、アルバイトをしていたが、自宅でまとまって学習できる時間は、毎日ではないものの、十分に確保できる。しかし、その時間が管理されていない。1. ゴールを見据えて、いつまでに何をどう学習するかについて自分で計画を立てた経験が乏しい。2. 語彙学習だけでなく学習全般に対し、方法に一貫性がない。

クラスの大半の学習者は、国で高等学校を卒業後、来日した。彼らにとって「勉強」とは、学校で、教師の指示に従い課題をこなす、テストのために覚えるというイメージのようだ。学習方法を自己分析し、弱い部分を克服する方法を考えるという視点がないように感じた。

1.4 教材作成の背景

1.1で述べたように、クラスがスタートした2025年4月直後から、漢字や語彙が覚えられないので、繰り返しテストをしてほしいという声も多かった。そこで授業では、N3レベル相当の漢字テキストを一通り終えたのち、同じテキストを2周、3周しながら毎日小テストを実施していた。その成果もあって、漢字を書くことには、まだ困難が多いものの、読む力は伸びていると感じられた。しかし、期間があくと、覚えたはずの漢字が読めなくなり、既習語彙の意味を忘れ、元通りになる傾向があった。「こんなにたくさんの語彙を勉強しているのに、全然使えるようにならない。」「言葉が聞き取れず聴解が苦手。聴解の宿題が欲しい。」という声もあった。学校では、年2回のJLPTが実施される1か月前から試験対策授業が行われている。今回学校の事情で、対策授業を9月半ばから行うこと

になった。そこで前倒しになった期間は、既習 N3 語彙を定着させたいと考え、それを実施するために、聴く、読む、話すで、同一語彙に何度も触れられるような授業デザインを検討した。

2. 既習の N3 語彙を定着させるための授業デザイン

2.1 選定した同一語彙を使用した聴解・読解・会話教材の作成

既習語彙であっても、聞いた時理解できず、読もうとしたら漢字が読めず、単語テキストで確認するまで意味が思い出せない。その語彙を使うことはさらに難しい。このような問題点を踏まえ、教材の構成とタスクの内容を検討した。まず、授業で使用していた『はじめての日本語能力試験 N3 単語 2000』で、既習のチャプターから習得してほしい語彙を選定し、会話タスクを作成した。教材作成当時、テキストは全 12 チャプター中、8 チャプターが既習だった。

まず、学習者が現実に遭遇する場面を考慮し、チャプター1～5の中から語彙から選定し、3つのテーマで、ロールプレイもしくはミニシアターのタスクを作成した。次に、語彙リストを作成し、事前に意味や漢字の読み方を書き込んでくることを宿題とした。そして、会話タスクと同じテーマで聴解タスクを作成した。その際、スクリプトと設問は、N3 聴解問題の概要理解分野を意識した。聴解タスクは、クラスの SNS に配信し宿題とした。

さらに、会話、聴解タスクと同一語彙を使用し、同じテーマで読解タスクを作成した。構成は N3 短文読解問題を意識し、文字数、設問を設定した。それぞれのタスクのたたき台を作る際、生成 AI (ChatGPT 等) を利用し、修正を加えていった。授業実施の前日に、学習者に語彙リスト、読解、会話タスクを冊子にして配布した。

2.2 授業のステップ

2.2.1 読解タスクの進め方

授業は筆者を含め 2 名で担当し、9 月半ばから週 3 日、1 回 90 分で約 1 か月間行った。授業開始前に机を教室外に出し、椅子だけを四方の壁に沿って配置した。1 日目は読解タスクを行った。まず制限時間内に、1 人で黙読し、問題を解き、読む際にわからない言葉や読めない漢字があった場合は、宿題で書きこんできた語彙リストを参照した。次にペアで問題の答えをすり合わせ、なぜそれが正答なのかを話し合った。全体で正答を確認後、4～5 人で椅子を寄せて円形に集まり、文章の音読練習を行った。1.2 で述べたように、クラス活動のステップとして、1 人でやってみた後、ペアで確認し、グループで練習するという形を普段の授業でも実践していたため、活動の流れはスムーズだった。教師は各グループを回りながら、フィードバックを行った。

2.2.2 会話タスクの進め方

2 日目は会話タスクに入る前の導入と練習を行った。会話タスクは、第 1 週目はロールプレイ、第 2 週目と第 3 週目は、ミニシアター（台本を覚え 3 分程度で演じる）であった。そのための口慣らしとなる短いフレーズを練習したり、暗記して発表したりした。3 日目は、会話タスクに取り組んだ。グループごとに集まり、練習を重ねたのち、リハーサルを行った。教師は、グループを回りながら、発音や演技等アドバイスを行った。教室

中央に十分なスペースが確保できていたため、リハーサルやフィードバックもやりやすかった。学習者は、発表だけでなく、グループごとに担当を決めてクラスメートの評価も行った。学習者がその場で評価をつけやすい簡易的なループリッを作成し配布した。また、第2週目の会話タスク発表の際は、サプライズゲスト（この授業を担当していない教師2名）を招き、発表を見てもらい、最優秀俳優賞、特別賞などを決め、表彰した。自信がない、語彙が覚えられないと言っていた学習者がやる気を持って取り組み、入賞したことが印象的であった。

3. 聴解タスクと音読、ディクテーションテスト

2.1 で述べた聴解タスクを語彙習得に生かすために、今回の授業実践がスタートした直後から、同時に音読とディクテーションも始めた。こちらは毎日の授業で最初に行うルーティンとし、授業のスタートとともに、全員起立して行った。宿題の聴解タスクを聴いた後、毎日スクリプトを音読し、一文ずつディクテーションすることで、語彙の定着につなげたいと考えた。表記ミスが多い長音に注意喚起し、1語1句を正確に書きとるために、漢字語彙もすべてひらがなで書いてもらった。教師が採点して、3つ以上のミスがあった場合は、翌日の授業後に清書してから帰るというルールにしたところ、回を重ねるにしたがって表記ミスの改善が見られた。

4. 振り返り

今回の授業実践後及び、2025年第2回JLPT受験直前に、学習者に対して、簡単なアンケートを行った。会話タスクに関しては、20名中1名を除き、勉強した語彙でたくさん話すことができた、語彙が覚えやすいなどの肯定的な意見が多かった。一方、自身の自己効力感や努力に関しては、共通して50%前後という傾向が見られた。授業で実施した9月～JLPT直前の学習者20人の語彙テストの成績を振り返ると、成績は1、2名を除き、ほとんど差が見られず毎回6割弱であった。また、期間を置いてから、同じテストを繰り返し実施した場合も、あまり成績に変化が見られない傾向があった。

学習者のニーズを踏まえ、既習語彙を定着させるための授業をデザインし、試行した。わずか1か月間の実施だったため、長期にわたる実践を繰り返し、効果を検証していきたい。しかし、それ以上に求められるのは、学習者が語彙習得をはじめとする日本語学習に切実なゴールを持つことであると感じた。それなしでは、教師側がどんなに情熱を持ち、授業を工夫しても、限界があるのかもしれない。どうしても覚えたい、覚えなければならないという強い動機を持つこと。どうすればゴールに到達できるのかを試行錯誤しながら自ら学んでいく力を身につけること。これらを育てるためには、どんなサポートができるのだろうか。次の実践の課題としたい。

参考文献

アークアカデミー（2022）『はじめての日本語能力試験 N3 単語 2000』アスク
J.M. ケラー・鈴木克明（監訳）（2010）『学習意欲をデザインする』北大路書房